

パン

asitaba@ねこ

パン

ふわふわの生地に包まれた、甘酸っぱいイチゴ果肉入りのおいしいパン。
それがボクだ。

昨日、この家に住む女の子に105円で買われた。

最近中高生に人気らしい。

ここまでは、これと言って不思議な点はないと思う。

ボクの話はここからだ。

生のイチゴ果肉が入っているボクの賞味期限。

おいしく食べるには今日中に食べるのが一番なはず。

であるが、彼女は一向にボクを食べようとしなない。

ボクのまどっている袋さえ開けようとしなないのには、一種の悲哀さえ感じる。

食べる気がないのなら、それは当然のことだろう。

それでは、なぜ買ったのだと問いたい。

ボクもパンとして生きているからには、

おいしそうではなく、おいしいと言われてから死にたいものだ。

ボクは彼女に早く食べるよう訴えかける。

だが、こちらがパンということもあってか、目もくれない。

きっともう背景と同化しているのだろう。

「あーあ。これ賞味期限とっくに過ぎてる。もういちごだめだろうな、もったいないけど……」